

# 『念佛三毒滅盡不滅盡之諍論筆記』の研究

館 和 典

## 〔抄 録〕

江戸期の浄土宗では念仏によつて三毒の煩惱が滅するかどうかに  
ついて論争が交わされていた。それに関する記録を纏めたのが、  
『念佛三毒滅盡不滅盡之諍論筆記』である。そこには、増上寺第  
十二世源誓存応、黒谷金戒光明寺第二十六世盛林、東漸寺隠居團  
誓、弘経寺善慶と善導寺幡随意の「念仏による滅罪」に関する論

争が記録されている。本稿では主に存応と盛林の念仏滅罪論につ  
いて考察した。

キーワード 『念佛三毒滅盡不滅盡之諍論筆記』 存応 盛林

念仏滅罪

## はじめに

文禄二年（一五九三）二月頃、浜松城下の浄土宗寺院の心送寺にお  
いて、西傳寺行公と法林寺南竜が会合して、称名念仏による煩惱罪障  
の滅不滅論争が行われた。行公は念仏による滅罪、南竜は不滅罪を主  
張し、お互い譲らず結論がつかなかった。そのためこの問題は浜松城  
主堀尾六左衛門と奉行を経て、家康の耳にまで達した。この出来事は  
宗教統制を敷こうとする江戸時代にあつて、広範囲に波紋を広げた。  
当然、京都や江戸にも波及し、檀林寺院までにこの問題が及んだ。存

応を中心として多くの檀林が滅罪論を主張した。しかし、大巖寺靈巖  
（二五五四―一六四二）と盛林は「不滅」を主張したことで浄土宗内  
を揺るがす問題へと発展した。この問題の発端は、罪障と煩惱を同等  
に扱うか否かである。存応、幡随意、團誓、善慶は煩惱と罪障を同等  
に扱い、称名念仏によつて煩惱、罪障が滅して往生出来ると主張した。  
一方、靈巖と盛林は煩惱と罪障を別々に扱い、根本となる煩惱から罪  
障が生じるのであり、念仏滅罪とあるようにただ罪障が滅すると主張  
して、凡夫とは煩惱未断の者のことを指すのであるから、煩惱が滅尽  
しなくとも極楽に往生することが出来ると主張した。

しかし、主張の是非は別として、存応の働きかけによつて、政治的に存応の主張する滅罪論が是とされ、不滅罪論を主張した靈巖は非とされた。さらに存応は知恩院第二十九世満誉尊照（一五六二—一六二〇）に不滅論者を六十余州から追放するように命じ、以降不滅罪を主張することを禁じた。このように存応は家康に支持されたことによつて、念仏による滅不滅の論争を収めることが出来た。この出来事が関東浄土宗法度を制定するきっかけになったと推測されている<sup>1</sup>。

この書物には、主に増上寺第十二世源誉存応と黒谷金戒光明寺第二十六世盛林と東漸寺隠居團誉（没年不明）、弘経寺善慶（一六〇三）、善導寺幡隋意（一五四二—一六一五）の「念仏による滅罪」に関する論争が記録されている。それは直接対論の形をとつたものではなく、文書を通してのものである。この論争の当事者である存応と盛林、他三名の浄土宗僧侶の関係を概略見てみると次のようになる。

増上寺第十二世貞蓮社源誉存応慈昌は、後陽成天皇に宗義を進講して普光観智国師の号を賜つた、また徳川家康（以下家康と略す）の帰依を受け近世浄土宗発展の基礎を構築した高僧の一人である。一方、黒谷金戒光明寺第二十六世泰蓮社琴誉祖阿盛林（一五四五—一六一七）は、生実大巖寺の安誉虎角（一五三九—一五九三）に師事して宗乗を学んだ。その後、故郷に帰つて布教に専念した。文禄二年（一五九三）家康の命で上洛し浄福寺に董住した後、慶長十五年（一六一〇）に金戒光明寺の住持となった。

ここで注目すべきことは存応の師は存貞であり、一方、盛林の師は虎角である。そして虎角の師は道誉貞把（一五一五—一五七四）であ

る。貞把と存貞は、共に増上寺の第九世と第十世である。また室町初期に了誉聖罔によつて創始された本式の伝法に対して貞把と存貞は略式の伝法である簡条伝法を制定した。この伝法は二人に名をとつて道誉流と感誉流と呼ばれている。従つて存応と盛林の師を辿れば、元々同じく増上寺住持であつた貞把と存貞に行き着く。また存応、盛林共に家康との深い関わりをもつていたのである。

本稿文では論争の焦点に関わる双方の滅罪観と滅煩惱観を見ていくことにする。

## 1、「浄福寺筆記」について

『念佛三毒滅盡不滅盡之諍論筆記』の冒頭に「浄福寺筆記」と称されている書状が記載されている。「浄福寺筆記」は文禄五年（一五九六）に盛林から浜松城主の堀尾六左衛門並び奉行に送られた書状である。その全文は次のようなものである。

就<sub>ニ</sub>西傳寺<sub>ト</sub>法林寺<sub>ト</sub>法戦之義<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>致<sub>ニ</sub>上都<sub>ニ</sub>至<sub>ニ</sub>寺<sub>ニ</sub>書物<sub>ヲ</sub>被<sub>レ</sub>脩<sub>ニ</sub>高議<sub>ニ</sub>于今<sub>ニ</sub>被<sub>ニ</sub>相待<sub>ニ</sub>候<sub>ト</sub>処<sub>ニ</sub>彼西傳寺<sub>ニ</sub>遂依<sub>レ</sub>无<sub>ニ</sub>上洛<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>本山<sub>ニ</sub>先々勝劣不分明<sub>ニ</sub>候<sub>ト</sub>及<sub>ニ</sub>承分<sub>ニ</sub>西傳寺<sub>ニ</sub>被<sub>ニ</sub>申様<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>平生念佛<sub>ニ</sub>一念々々罪障<sub>ト</sub>煩惱<sub>ト</sub>断尽<sub>ニ</sub>若不滅者<sub>ニ</sub>本願<sub>ニ</sub>名号<sub>ニ</sub>疵付<sub>ニ</sub>申由<sub>ニ</sub>候<sub>ト</sub>也<sub>ニ</sub>惣而<sub>ニ</sub>三經一論<sub>ニ</sub>五部九帖<sub>ニ</sub>之内<sub>ニ</sub>罪障滅尽<sub>ニ</sub>往生文<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>煩惱断尽<sub>ニ</sub>往生之文<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>否<sub>ニ</sub>當流<sub>ニ</sub>之大意<sub>ニ</sub>平生念佛<sub>ニ</sub>一念云云滅罪<sub>ニ</sub>存<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>念佛<sub>ニ</sub>功力<sub>ニ</sub>難離罪障<sub>ニ</sub>分滅<sub>ニ</sub>煩惱<sub>ニ</sub>未断<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>雖去<sub>ニ</sub>遂<sub>ニ</sub>往生極樂<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>切鴨<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>續<sub>ニ</sub>謂<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>淨土宗<sub>ニ</sub>諸宗<sub>ニ</sub>超過<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>規模<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>何<sub>ニ</sub>不足<sub>ニ</sub>名号<sub>ニ</sub>瑕付<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>然<sub>ニ</sub>処<sub>ニ</sub>念々<sub>ニ</sub>罪煩惱<sub>ニ</sub>断尽<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>然<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>四十八願<sub>ニ</sub>之内<sub>ニ</sub>名号<sub>ニ</sub>本願<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>一穢土<sub>ニ</sub>證<sub>ニ</sub>佛品<sub>ニ</sub>与<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>義<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>極樂<sub>ニ</sub>雪上霜<sub>ニ</sub>与<sub>ニ</sub>然<sub>ニ</sub>前後諸願<sub>ニ</sub>弁

破<sup>スル</sup>者也證<sup>ニ</sup>拠<sup>ニ</sup>雖<sup>ニ</sup>繫<sup>ニ</sup>多<sup>ニ</sup>先<sup>ニ</sup>閣<sup>ニ</sup>レ之猶以被<sup>ニ</sup>疑<sup>ニ</sup>滯<sup>ニ</sup>与有<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>洛<sup>ニ</sup>可被<sup>ニ</sup>遂<sup>ニ</sup>談  
合<sup>ニ</sup>遇<sup>ニ</sup>僧<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>文<sup>ニ</sup>證<sup>ニ</sup>可<sup>ニ</sup>弁<sup>ニ</sup>邪<sup>ニ</sup>正<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>也

文禄五年十一月十五日

堀尾六左衛門殿

洛陽淨福寺 琴譽判

并御奉行（一丁右）

つまり、西傳寺行公と法林寺南庵は念仏による滅罪に対する論争の是非を正す為に上洛することになっていた。盛林は書物を揃えて待っていたが、西傳寺行公は上洛しなかったので、論争に勝劣をつけることが出来なかった。

西傳寺行公は「平生念仏の一念一念によつて罪障も煩惱も尽く滅する。もし不滅であれば本願の名号に疵をつけることになる」と主張している。三經一論五部九卷の中に、罪障を滅して往生する文はある。しかし、煩惱が断尽して往生する文はあるだろうか。当流の見解では「平生念仏の一念一念によつて罪は滅する。念仏の功德の力によつて離れ難き罪障が滅し、煩惱は未断であつてもただちに往生を遂げることが出来る」となる。鶴の足は長いからといって切つたり、鴨の足は短いからといって継いだりすることはない。それぞれの性をむやみに改めることは出来ない。浄土宗の教えは諸宗に超過するから名号の働きには何の不足もない。一念一念に罪障が共に断尽する。四十八願の内の名号の本願、つまり第十八願によつて穢土において仏品を証するとすれば、極楽は雪上の霜のようなものである。それは第十八願の前後の諸願を弁破することになる。この問題に関する証拠は多くあるが、

それはしばらく差し置いて、なおも疑とするところがあるならば、上洛して談合せられたい。私は文証をもつて邪正を論じる者である、と述べている。

この「淨福寺筆記」に対して、存応、團誉、善慶、幡随意の四人はそれぞれ反論を著しているが、それらに対して盛林は再び反論を著している。ここでは存応の反論を伝える「遠芴濱松西傳寺法林寺問答芴芴江戸増上寺より」（二丁左）を取り上げることにする。

## 2、「淨福寺筆記」に対する存応の反論

存応は盛林を批判する際、「爰武芴江戸増上寺存応云人遇老筆略被<sup>レ</sup>致<sup>イ</sup>披見一紙之内分五段書<sup>ニ</sup>破<sup>ニ</sup>文<sup>ニ</sup>」（六丁右）とあるように五項目をもうけている。

まず一つ目として、盛林は「淨福寺筆記」において次のように述べている。

三經一論五部九帖之内罪障滅尽往生文有<sup>レ</sup>之煩惱断尽往生之文在<sup>ニ</sup>之否<sup>（一丁右）</sup>

つまり、三經一論五部九帖の中に罪障滅尽往生の文はある。しかし、煩惱が断尽して往生する文はあるのか、と疑問を呈している。これに対して存応は次のように述べている。

一、正理解云夫念佛妙行法藏比丘昔於先佛處從<sup>ニ</sup>二百一十億諸佛願行中<sup>ニ</sup>選<sup>ニ</sup>択<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>也故選<sup>ニ</sup>取<sup>ニ</sup>金玉<sup>ニ</sup>故選<sup>ニ</sup>択<sup>ニ</sup>行也豈<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>妙<sup>ニ</sup>緣<sup>ニ</sup>乎  
（二丁右）

つまり、念仏の妙行は法藏比丘の昔、先仏の処において、二百一十

億諸仏の願行の中より選択された行である。どうしてそれが妙ならざる縁であろうか、と述べている。さらに「无量壽經」下云彼佛名号歡喜踊躍乃至一念當知此人為得大利則是具足无上功德」(二丁右)と言って、仏名号を聞いて歡喜踊躍して、念仏を相續すれば、淨土往生という大利益と無上功德を得ることが出来ると述べて、『無量壽經』巻下をその根拠として挙げている。そして、念仏が無上の功德である所以について「選択云无上功德者是對有上言也以余行為有上念佛為无上」(二丁右)と言って、『選択集』第五章を引用し、さらに『大原談義聞書鈔』からも次のように引用している。

万善妙體即名号六字恒沙功德備口稱一行大願業力所構出令讓与万德行者他力難思巧方便令超過一稱衆善乃至大利名号也无上功德也(二丁右)

つまり、阿弥陀仏の六字の名号には無量の功德が備わり、大願業力により万徳が念仏行者に譲り与えられる。称名は他力難思の巧方便であり、ただ一称でも衆善を超過させてくれる。そういう大利益があり、無上功德があると述べている。よって存応は、念仏とは選択された行であり、この名号には無上の功德があり、名号を称えることによって煩惱が尽きると主張している。

また『般舟讚』から「門々不同八万四千為滅无明因果因利劍即是弥陀号一聲稱念罪皆除」(二丁左)と、その注釈書である良忠の『般舟讚私記』の「无明者煩惱道果者苦道業因者業道也」(二丁左)を引用している。

つまり、一声称念することによって無明・果・業因による罪が皆除

かれると言ひ、『般舟讚私記』には無明とは煩惱道、果とは苦道、業因とは業道と述べている。このように八万四千の法門が滅除の対象とするものを挙げた上で、利劍の名号によって諸の煩惱が皆滅尽すると説いている。

また『安樂集』下巻を典拠として次のように述べている。

如摩訶衍中説云諸余三昧非為三昧何以故或有三昧但能除瞋不能除癡貪乃至一切諸障悉皆除也(二丁左)

『安樂集』第四大門、第三問答解釈を補ってみると、念仏三昧以外の三昧は三毒の内の一毒を除けば後の二つは除くことが出来ない。しかし、念仏三昧は三毒と諸障を除くことが出来ると説いているではないか、というのである。更に存応は次のように述べている。

爰淺智短才人与可有意趣者三心具念佛人凡夫修行前念々佛後念作惡故三毒不滅云不審可會云念佛行者凡夫習又三毒超雖然念念念佛衆罪消除是隨犯隨懺云也(三丁右)

つまり存応は、盛林のことを淺智短才の人と言っている。その理由は三心具足の人の念仏も凡夫の修行であるから前念に念仏しても、後念に悪を作すため、三毒は滅することがないという疑いを持っているからである。しかし存応は、念仏の行は凡夫の習であるから、再三三毒が起るけれども、念念に念仏すれば衆罪が消除することが出来る、と、隨犯隨懺を用いて反論しているのである。この隨犯隨懺について存応は、善導の『般舟讚』、良忠の『般舟讚私記』と『大原談義聞書鈔』の文を引用している。

まず、『般舟讚』の「念々称名常懺悔人能念佛佛還憶」(三丁右)の

文を挙げ、続いて『般舟讚私記』の「念々称名等者念々トハ与常ト云義是レ同称名スレハ即有リ滅罪力一用ニ故云ニ懺悔ト」〔三丁右〕を引用し、また、『大原談義聞書鈔』の「一生造惡凡夫相續妄念衆生隨犯隨懺レハ消除衆罪」〔三丁右〕と、「凡癡惡修善佛教正意癡々而不レハ癡何一為ニ息妄修心者行道大途一息ナレハ息々而不レハ息何一為ニ但須憑ニ弥陀之本願一但須唱他力名号一此則造惡上癡惡之法也妄心中息妄行也」〔三丁右〕の文を用いて一生造惡の凡夫、相續妄念の衆生は隨犯隨懺することによって衆罪が消除できる。つまり口唱称名の一行は造惡の上の癡惡の法であつて、妄心の中の息妄の行である。これらの証拠を挙げ存応は、念仏によつて罪障・煩惱を含むあらゆる罪を滅することが出来ると主張している。

二つ目は、煩惱未断の凡夫でも念仏の功力によつて往生出来るかについて、盛林は次のように主張している。

當流之大意ハ平生念佛一一念云云滅罪ハ存レ之以ニ念佛功力一難離罪障一分滅レ煩惱未断也ト雖去遂ニ往生極樂一不レ切鴨不續謂也一〔二丁右〕

つまり、当流の見解では、平生念仏の一念一念に罪は滅する。念仏の功德の力によつて離れ難き罪障が滅すれば、煩惱は未断であつてもただちに往生を遂げることが出来る。鶴の足は長いからといって切つたり、鴨の足は短いからといって継いだりすることはない。それぞれの性をむやみに改めることをしないで、それぞれに応じた天分を踏まえて物事に当るものである。

これに対して存応は次のように述べている。

一ッ正理解云宗門意極惡最下ハ為レ本故不假断證直入報土判未断惑凡夫報土得生尺横超断益章一〔三丁左〕

つまり、宗門の意は極惡最下の凡夫救済を本意としているので、未断惑の凡夫でも報土に往生できるが、これは横超断の利益である。この横超断の利益の根拠として、『無量寿經』卷下の「横截五惡趣々々自然閉」〔三丁左〕と、『安樂集』卷下の「一時頓捨故名横截云」〔三丁左〕と、『觀經疏』玄義分第一の「横超断四流」〔三丁左〕等の經典を引用している。これを踏まえていない盛林に対して、存応は次のように述べている。

知チ機キ不レ知レ法一〔三丁左〕

つまり、盛林は摂取される凡夫のことは知っているが、根本となる教義を知らないと言っているのである。さらに存応は『般舟讚』を引用して次のように述べている。

殘殃未尽花中合十二却後始花開一已穢土ニ用滅淨土ニ業躰滅一云義有レ此土ニ不レ滅可レ云如何會ニ云宗旨一四義建立一此是此土修治断除相對教門一往化義非実義一〔三丁左〕

つまり、浄土に往生すると、まず蓮華の花中に抱摂されるのだが、殘殃がある間は花中に留まり十二劫の後、殘殃が滅することによつて花が開くことである。存応はこれに関して穢土において業用を滅し、浄土に往生した後に業体が滅するという教義があるが、これは宗旨の四義説2によると仮の教えであつて真実の教えではないと述べている。

三つ目は、念仏によつて罪障・煩惱共に滅し、穢土において悟れるのなら極樂浄土に往生する意義がなくなるのではないか、という盛林の批判に対して、存応が反論する箇所である。



盛林は「淨福寺筆記」で次のように述べている。

其淨土宗諸宗超過之規模在<sup>レ</sup>之有<sup>ニ</sup>何<sup>一</sup>不足<sup>ニ</sup>名号<sup>ニ</sup>瑕<sup>ニ</sup>付<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>然<sup>ニ</sup>処<sup>ニ</sup>念々<sup>ニ</sup>罪煩<sup>ニ</sup>共<sup>ニ</sup>断<sup>ニ</sup>尽<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>然<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>四十八願之内名号本願以<sup>レ</sup>一<sup>ニ</sup>穢土<sup>ニ</sup>證<sup>ニ</sup>佛<sup>ニ</sup>品<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>其<sup>ニ</sup>義<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>極樂雪上霜也<sup>ニ</sup>〔一丁右〕

つまり、淨土宗には諸宗を超過する救済の規模がある。だから名号の働きの不足もない。一念一念に罪煩が共に断尽するというのであれば、第十八願の称念仏の一行によって穢土において仏果を得るということになるではないか。そうであれば、極樂は雪上の霜のように何んの意義も發揮しえないものになってしまうのではないかというのである。

これに対して存応は次のように述べている。

立<sup>ニ</sup>方域<sup>ニ</sup>即<sup>ニ</sup>无方域<sup>ニ</sup>正假有相<sup>ニ</sup>即<sup>ニ</sup>无色相<sup>ニ</sup>乃至見生<sup>ニ</sup>當<sup>ニ</sup>躰<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>改<sup>ニ</sup>凡夫不覺<sup>ニ</sup>无生<sup>ニ</sup>本施<sup>ニ</sup>轉入<sup>ニ</sup>〔四丁左〕

つまり存応は、空無相の境に入ることの本旨とする大乘仏教にあつて淨土教は何故、指方立相を説くのかという問題について、淨土は無相の理を離れたものではなく仮設に依るものである。従つて、凡夫の思慮・分別の見解に基づく往生淨土という見生も改めることなく、本来の無生の境に転入することが出来ると述べている。

四つ目は、念仏によつて罪障・煩惱共に断尽するということであれば、第十八願の本願の名号によつて穢土で仏果を得るということになるではないか、という盛林の批判に対しては、次のように反論している。

一正理解云四十八願付而攝法身攝淨土攝衆生三重有攝衆生願攝機攝行有今十八願攝行生因攝機攝行取分見不審无雖<sup>レ</sup>然念佛名躰

義用不離故名号称<sup>ニ</sup>光照柔軟<sup>ニ</sup>益有<sup>ニ</sup>〔五丁右〕

つまり存応は、淨影寺慧遠が『無量寿経義疏』において四十八願を摂法身、摂淨土、摂衆生の三つに分ける説を踏まえ、さらに聖問の『釈淨土二藏義』に出る用語を用いて、次のように述べている。すなわち、摂衆生の願には摂機摂行があり、その中で第十八願は摂行生因である。この摂機摂行を分けてみれば疑いは無いものの、念仏は名体義用が不離であることから念仏を称えることによつて光照柔軟の利益を得ることが出来ると述べている。

そして、光照柔軟の利益について『無量寿経』上巻の「三垢消滅身意柔軟<sup>上</sup>」〔五丁右〕を引用し、阿弥陀仏の光明に照らされたならば、貪欲・瞋恚・愚痴の三煩惱はたちまち消えて、身も心も柔軟になるというのである。こうした存応の反論を見ると、その主旨は第十八願は衆生が念仏行によつて淨土に摂取される願であるから、第十八願は穢土成仏の願ではなく、彼土往生の願であるということである。

五つ目は、盛林が業と煩惱を各別として扱っているのに対して批判している箇所である。まず盛林の主張を次のように挙げている。

一淨福寺云分者業煩惱各別比判是又偏属〔五丁右〕

つまり存応は、盛林の主張を偏見とし、次のように言っている。

一正理解云生死引就<sup>ニ</sup>罪業<sup>ニ</sup>煩惱業苦<sup>ニ</sup>三道分則業煩惱各別不<sup>レ</sup>分則惣生死引結縛皆罪業云是々不同不可<sup>ニ</sup>一准<sup>ニ</sup>然者偏云未在<sup>ニ</sup>云

〔五丁右〕

つまり、生死の原因を煩惱・業・苦というように三分するのか、三分せずに罪業と総括してみるのか、それぞれの見解がある。だから、

それを一説に定めて論ずるのはまだまだ十分ではないと言っている。

### 3、存応に対する盛林の再反論

盛林は、「増上寺源訃記録之破文」を著して、存応が五段に分けて批判したものに對して再び反論したのである。しかし、この破文の冒頭部分には、「今又作破尺而贈向後敢非常人言不可入常人耳」〔六丁〕とある。つまり、今また破釈を作つて後の人に贈るのだが、常人向けの言論ではないので常人の耳に入れてはならないという。それはこの破文が始めから公表する為に書いたものではなく、この論争に関して仏教教理に精通した後の人に、正しい見解を求める為に書いた盛林秘蔵の書であつたと考えられる。その盛林の反論については、滅煩惱・滅罪についての両者の立場がよく分かる一つ目と二つ目の批判を取り上げることにする。

一つ目の再反論は、存応が念仏の妙行は法藏比丘の昔、先仏の処において、二百一十億諸仏の願行の中より選択された行であり、それが妙なる縁であると念仏往生の本願の深厚性について述べていることに對してである。盛林は次のように述べている。

淨福寺予云古人云欲達能破者先達所破矣彼執者不達所破故能破又不中其故誰云不選本願之念佛也所以決疑鈔云其本願者自二百一十億諸佛願行之中選本願也故大原云此易修功高易行理深故也此則本願名勝易二義顯然余行不可並於肩故善導云自余衆善雖名是善若比念佛者全非比較也〔六丁左〕

すなわち、古人が言っているように、話題の俎上にあることを論破しようとするなら、そのものの内容を熟知しておく必要がある。ところが存応は問題の所在をよく理解出来ていない。誰もが念仏行を不選本願などと言っているわけではない。良忠の『決疑鈔』巻第一にも本願念仏とは二百一十億もの諸仏の願行の中から選択されたものである、また『大原談義聞書鈔』には、天台座主顯真の速やかに生死を離れる道についての問いに對して、法然は廬山の慧遠の『念佛三昧宝王詩序』に出る諸の三昧の中でも念仏三昧は功德が高く、しかも行じ易きものであるという文を持ち出している。ここで盛林が『決疑鈔』巻第一を持ち出した所以は明らかではないが、聖光（一一六二—一二三八）の『徹選本願念佛集』巻上（以降『徹選択』と略す）には、諸仏によって念仏行が選択されなかったことを取り上げる文脈で「不選択」という語が使われていることと関連していると考えられる。すなわち念仏の深厚性は十分に承知していると前置きして、次のように述べている。

然今論談平生念佛一念功力滅罪斷罪論全選本願不選本願念佛非論之何事寄法鉢具徳乱還機修行次位乎〔七丁右〕

つまり、念仏一念の功力による滅罪・断煩惱の論談において、選本願または不選本願念仏という論点を持ち込むべきではない。何故、問題を名号の法体に功德が備わることのみ託して理解しようとするのか。それは還つて機の修行の順序を乱すことになると批判している。ここには盛林が、「滅」の働きを全て名号の功德のみに託して、念仏者の機根に差異があるという現実を看過してはならないという立場を

取つてゐることが窺える。また盛林は次のように主張している。

爰<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>案<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>念佛勝行<sup>ノ</sup>故煩惱斷<sup>ト</sup>尽思也又勝行<sup>ノ</sup>念佛不<sup>レ</sup>滅<sup>ト</sup>尽煩惱<sup>ノ</sup>其功不可立思也<sup>少ニ</sup>所見<sup>ニ</sup>多<sup>ニ</sup>所佐<sup>ニ</sup>口決鈔<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>了<sup>ト</sup>三經一論<sup>ノ</sup>說相<sup>ノ</sup>五部九卷判<sup>レ</sup>盡盛罪障消滅法<sup>ヲ</sup>悉勸<sup>ニ</sup>淨土往生<sup>ノ</sup>之行<sup>ニ</sup>因<sup>レ</sup>茲雖<sup>レ</sup>有<sup>ト</sup>煩惱未斷<sup>ト</sup>凡夫生<sup>ニ</sup>淨土<sup>ノ</sup>之說教<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>ト</sup>罪障未<sup>レ</sup>盡衆生々々<sup>ノ</sup>淨土<sup>ノ</sup>之經尺<sup>ハ</sup>何<sup>ニ</sup>況當流相傳<sup>ノ</sup>之諸鈔<sup>ノ</sup>中滅罪往生<sup>ノ</sup>文惟<sup>多シ</sup>上<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>此文<sup>ヲ</sup>證<sup>ス</sup>三經一論五部九卷之中罪障滅<sup>ト</sup>盡往生<sup>ノ</sup>文有<sup>レ</sup>之煩惱斷<sup>ト</sup>盡往生<sup>ノ</sup>文無<sup>レ</sup>之云汝謬者愚侶<sup>ハ</sup>了<sup>ト</sup>普字<sup>ニ</sup>御言<sup>ヲ</sup>何屬<sup>ニ</sup>謬解<sup>ニ</sup>乎<sup>ハ</sup>了<sup>ト</sup>普<sup>ハ</sup>一宗破滅<sup>スル</sup>事不<sup>ニ</sup>弁給<sup>ハ</sup>汝<sup>ハ</sup>一宗建立<sup>ノ</sup>之旨能<sup>ク</sup>々<sup>ニ</sup>弁<sup>ス</sup>之云与<sup>ニ</sup>界言<sup>ヲ</sup>有<sup>ニ</sup>千万<sup>ノ</sup>誰許<sup>レ</sup>之乎<sup>ハ</sup>（七丁右）

つまり、存応の理解を見てみると、念仏は勝行であるから煩惱も断尽することになる。しかし盛林は、勝行の念仏であっても煩惱を滅することは出来ない。このことに關する所見は少ないけれども補つてくれるものは多いと述べ、聖問の『浄土述聞口決鈔』巻上に出る「当果を礙る罪障を尽さずと雖も尚往生を得る」という義は、有り得るのかという問いに対して、そのようなことはないと否定する文を引用して、「三經一論の説相、五部九卷の中には盛んに罪障消滅の法を挙げて浄土往生の行を勧めている。これらのことから煩惱未断の凡夫が浄土に生ずるという説教はあるが、罪障未断の衆生が浄土に生ずるという経釈は見る事が出来ない。また当流相伝の諸鈔の中に滅罪往生の文は多い」と述べている。これらを根拠として三經一論五部九卷の中に罪障滅尽往生の文はあるが、煩惱断尽往生の文は無いという私の説に關して、存応は了普の御言を挙げて反論しているのであるが、どうして私の見解が謬解になるのかと疑問を呈し、了普は一宗を破滅

するような事を弁じていないではないかと述べ、存応の説示を批判している。

そして、「然<sup>ハ</sup>正理解<sup>ノ</sup>頭可<sup>レ</sup>増<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>一字<sup>ヲ</sup>求<sup>ニ</sup>好肉上<sup>ノ</sup>疵<sup>ヲ</sup>故後々<sup>ニ</sup>准<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>執者引<sup>レ</sup>經云无量寿經下云彼佛名号歡喜踊躍乃至一念當知此人為德大利即是具足无上功德<sup>ト</sup>已<sup>ニ</sup>選<sup>ト</sup>択云无上功德<sup>ト</sup>者是對<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>上<sup>ノ</sup>言也<sup>ヲ</sup>以<sup>ニ</sup>余行<sup>ヲ</sup>為<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>上<sup>ノ</sup>以<sup>ニ</sup>念佛<sup>ヲ</sup>為<sup>ニ</sup>无上<sup>ノ</sup>上<sup>ト</sup>已<sup>ニ</sup>（七丁左）」と存応の正理解の文の冒頭には「不」を付け加え、不正理解とすべきであり、このことは肉の上の疵を求め好むようなことであつて全く無意味なことであると厳しく批判している。それなのに存応は煩惱断尽の証左として『無量寿經』巻下の流通分、またそこを引用する『選択集』第五章を引用していると盛林は指摘している。

続いて盛林は、道鏡・善道の『念佛鏡』を引用して次のように述べている。

予云念佛鏡云准<sup>ニ</sup>觀經<sup>ノ</sup>中念佛一口<sup>ノ</sup>滅八十億劫生死之罪<sup>ヲ</sup>還得<sup>ニ</sup>八十億劫微妙功德<sup>ヲ</sup>唯<sup>ニ</sup>一劫功德尚不可思議<sup>ノ</sup>何況百劫千劫万劫億劫功德不可知數<sup>ト</sup>故云不可思議功德<sup>ト</sup>已<sup>ニ</sup>故知一念滅罪之劫不可思議也故云无上功德<sup>ト</sup>余行<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>レ<sup>ハ</sup>故云有<sup>ニ</sup>上<sup>ノ</sup>又功德約<sup>ニ</sup>法躰<sup>ノ</sup>感應之淺深依機之上<sup>ニ</sup>下<sup>ノ</sup>然<sup>ハ</sup>偏約<sup>ニ</sup>法躰含藏功德<sup>ノ</sup>忘<sup>ニ</sup>萬機<sup>ノ</sup>參差<sup>ヲ</sup>是非<sup>ノ</sup>白旗<sup>ノ</sup>一流之意<sup>ニ</sup>者法躰无上大利能立猶不<sup>レ</sup>乱<sup>ニ</sup>機根<sup>ノ</sup>上下<sup>ノ</sup>故世話云鎖鑰依<sup>ニ</sup>持手<sup>ノ</sup>已<sup>ニ</sup>盡此意<sup>ヲ</sup>与<sup>ニ</sup>何<sup>ヲ</sup>今忘<sup>ニ</sup>凡夫機<sup>ノ</sup>一念煩惱滅<sup>ト</sup>尽云乎<sup>ハ</sup>（八丁右）

つまり、『念佛鏡』第五较量功德門が、念仏多善根なることを論ずる中で、『觀經』によつて念仏一口すれば八十億劫の生死の罪を滅して、八十億劫の微妙の功德が得られる。ただ一劫の功德であつても不



可思議であるのに百劫、千劫、万劫、億劫の功德となれば計り知れない。だから不可思議功德というのである、という箇所を引用し、次のように主張している。一念滅罪の功德は不可思議である。それゆえ無上功德というのである。余行はそうでないの上有上というのである。念仏の功德は、名号の法体に集約されており、仏凡が感應する浅深は機根の上下によるのである。そうであるなら専ら名号の法体含蔵の功德のみに滅の働きを集約すれば、すべての機根の参差を忘れてしまうことになるではないか。それは白旗一流の教えではない。名号の法体は無上大利を打ち立て得るが、だからといって機根の上下を乱すことはない。中国の説話に由来する諺にも「名剣も使う人の腕前によって切れ味が違う」「正宗の刀も持ち手による」と言われる。それは、このような使い手の機根のことを意味するのであろう。それなのにどうして今、凡夫の機根を忘れて一念による煩惱滅尽を主張するのかと存応の説を批判している。

また存応が、『大原談義聞書鈔』に言うところの、阿弥陀仏の六字の名号には無量の功德が備わっており、大願業力により万徳が念仏行者に譲り与えられる。称名は他力難思の巧方便であるので、ただ一称で衆善を超過する大利益があり、無上功德があるという文を取り挙げていることについて、盛林は次のように述べている。

執者云大原云万善妙躰、即名号、六字、恒沙功德、備口稱一行、大願業力所構成、令讓也、可法、他力難思、巧方便令超過一稱衆善、乃至大利、名号无上功德也、上、万徳所皈、要法大利益、无上、徳果煩惱業尽、決定也、上、予云彼所引文、從本名号万徳所皈之本文也、是正約、名号、法躰、

万徳所皈、落居其上、兼機利益、文章也、先万徳所皈者、西晋上人云、凡聖道門、意談淨穢不二、凡聖一如、故於世間所有万法、諸法実相談之、此宗、伐之、如来所有万法也、其如来所有之弘成、名号所有功德、名号所有万法、万法皆成、名号躰内之功德也、上、此文明約法躰、但名号法躰万法圓備、故无上下大利、云此法躰機持、令超過一稱衆善、此是臨終廻心、下上品、機念佛一聲、功力除五十億劫罪、還得五十億劫微妙不可思議功德、意也、大利、名号无上功德、罪障年深、念佛日淺、一返滅、故余行不堪、此机、又功德浅危、此機所具、五十億劫罪滅、間敷事、尺尊知食余法、不説絡然、為極惡最下機、説極善寂上法、思召對下三品、十惡破戒五逆一聲、一念十念説給、爰以再三昧之勝劣非解、金鑰、雜行乎、故知以余行、為少利有上、以念佛、為大利无上、文義極成、違滅罪往生文之大旨、煩惱業尽、云乎古人云、如不及過、上

#### 〔八丁左目〕

つまり、存応は『大原談義聞書鈔』の冒頭の部分を以て煩惱業が滅尽すると主張する。盛林の見解は、名号の法体に万徳が所帰している、その上、機根の利益をも兼ねた文章である。万徳所帰について西晋聖聰（一三六—一四四〇）は、聖道門は淨穢不二、凡聖一如を説くから、世間のあらゆるものに諸法実相をみる。浄土宗はそうではなく、如来所有の万法を諸法実相とみるのであり、その弘き如来所有の万法が、名号所有の功德なのであるから如来所有の万法は名号体内の功德となつていのであると述べている。この文は明らかに名号の法体に万徳が帰することを説いている。だから名号の法体には如来の万法が円かに備るから無上大利という。この名号の法体を機に執持させて、

一称でも衆善を超過させる。これは臨終廻心の下品上生の機根が念仏一声のすぐれた利徳によつて五十億劫の罪を除き、かわりに五十億劫の微妙の不可思議功徳を得るという意味である。だから大利の名号には無上功徳があるから平生に犯した数々の罪障が深いとしても、念仏を一遍称えることによつて滅することが出来るのである。極悪最下の機根のために極善最上の法を説くと法然が『選択集』第十一章で述べているように、下三品の十惡・破戒・五逆の機根に一声一念十念を説かれたのである。余行をもつて少利有上となし、念仏をもつて大利無上となすという文義は、ここにおいて極まっているのに、滅罪往生の文の趣旨に反して煩惱業尽とまでいう。このように何事でもやり過ぎることは、やり足らないことと同じで良くないと孔子の『論語』先進篇第十六の言葉を使つて存応を批判し、更に次のように述べている。

又彼執着一宗果報極談之佛法爲不相傳故煩惱未斷不往生思処是則帶自力因分眼不知他力果分秘術故也金言処々滅罪往生之文煩惱未斷往生爲瞞々列祖不斷罪等刈尺偏滅罪往生慎然也何約法鉢功徳忘機教相應之利益當機上下乎何一念称名煩惱滅尽證拠有但執者雖无其證專煩惱斷尽云端的四知圓明爲乎又六道自在乎(九丁左)

つまり、存応が盛林に対して、一宗の果報極談の仏法が不相伝のために、煩惱未斷であれば不往生であると主張する處をば、それは自力の因分の眼を帯びた、他力因分の秘術を知らないからであると批判している。そして一方、金言の所々に見られる滅罪往生の文は煩惱未斷の往生を指しており、列祖の不斷罪等の解釈は、まさに滅罪往生を指

すことは明らかであると言っている。しかし盛林は、滅罪往生は認められども断尽煩惱往生は認められないという立場である。また盛林は、存応が名号法体の功徳のみに集約してしまつて、衆生の機と仏の教えとの相應の利益と当機の上下を忘れていると指摘し、一体、一念の称名による煩惱滅尽の文がどこにあるのかと言ひ、それでも煩惱断尽というのであれば、それは既に仏智である四智を円満し、六道の苦をも自在にしようということになると述べている。

続いて存応が『般舟讚』の「門々不同八万四千為滅无明果業因利釵即

是弥陀号一聲称念罪皆除」(二丁左)と、良忠の『般舟讚私記』の「无明者煩惱道果者苦道業因者業道也」(二丁左)の文を用いて「平生念佛力不限三毒諸煩惱滅尽歷然也」(二丁左)と、平生念仏の力によつて三毒に限らず諸の煩惱が滅尽すると主張するのに対して、盛林は次のように反論している。

予云此般舟讚之七言四句文盲漢執者不見經尽次第上二句尺尊出世給惣爲八万四千機八万四千法説應病良藥消息也然則迷情病大分不出煩惱業苦三道爲治三道能治法門八万四千此是大途自力得道文記全非他力本願利益故玄義云依心起於勝行門余八万四千漸頓各稱所宜隨經者皆蒙解脫已法事讚云有流見解心非一故有八万四千門已報恩經云衆生有八万四千煩惱爲對治之有八万四千法門已此等經尺尺迦一代之化道別非明名号攝益但同文故來之心得也無能外故其謬難道何余教利益三道滅尽文念佛煩惱滅尽證拠引之乎比奥々(十丁右)

つまり盛林は、存応はこの『般舟讚』の七言四句の文の經釈のわけ

を理解出来ないと言つて自らの解釈を述べている。『般舟讃』の七言四句の文の上の二句である「門々不同八万四」と「為滅无明果業因」の本意は、釈尊が出世され、八万四千の機根の為に八万四千の法を説かれた。このことはまさに良薬の消息である。だから迷情の病は、ほぼ煩惱・業・苦の三道に尽きる。その病を治すため、治の法門には八万四千がある。これはおおよそ自力得道の文証であつて、全く他力本願の利益の文証ではない。存応はまたこれに加えて『観經疏』玄義分第一（序題門）に出る、漸頓に亘る八万四千の法門のことや、『法事讃』巻下の冒頭に出る、釈尊教化が対機のゆえに八万四千門に及ぶ<sup>⑩</sup>という文を引用しているが、これらの経釈は釈尊一代の化道のことであつて、特別に名号の摂益を明かしたものではない。八万四千の法門に関する同文は外すことの出来ない古来からの心得である。それは私に對する批判を能くする論点外のことであるから、これら余教の利益を説く三道滅尽の文をどうして念仏煩惱滅尽の証拠として引用したのであるうかと疑問を呈している。つまり盛林は、『般舟讃』の文のうち、上の二句は通仏敎的立場に立つたものであり、下の二句は浄土門側の立場に立つてなされたものであるとしているのである。

そして次の「利釵<sup>⑪</sup>即是弥陀<sup>⑫</sup>号」と「一聲称念佛皆除」の二句の本意は、正しく念佛の功力による業道滅尽の証拠であつて罪皆除くとあるが、三道皆除くとは書かれていないと述べている。

つまり『般舟讚私記』によると、利劍については『三千佛名經』にただ佛名の利劍があつて、それによつて業繩を断てるとある。このことからこの文は明らかに業滅尽の証文であつて、諸煩惱滅尽の証拠ではないと存応を批判している。

さらに盛林は、道綽が『安樂集』卷上第一大門において一切衆生が生死の中に在つても念仏する心に衆生身内の三毒三障無辺の重罪を能断する功德がある〔十一丁<sup>⑩</sup>〕とする文に關して、その本拠は、聖光の『徹選択』卷下にも引用される『大智度論』第十三卷第七の次のよう  
な文にあると指摘している。

つまり盛林は、『安樂集』の典拠について『徹選釈』下巻所引の中の『大智度論』を引用し、念佛三昧は他の三昧とは違って、種々の煩惱・先世の罪を除くところがあるが、道綽の判釈はその取意文であると述べ、聖聰の『徹選釈本末口傳抄』の文を引用している。これについて聖聰は、下線部の聖光の『徹選釈』の本文である「念佛三昧は種々の煩惱、

種々の罪を除く」という文に対して自らの理解を述べている。これによると聖光の論は一代通申の論であり、その念佛三昧の意趣は、広く二門に亘っている。そして、聖道門では「断惑証理入聖得果」を主旨としていることから種々の煩惱は断惑ということになる。また浄土門では「不断煩惱得涅槃分」を主旨としていることから、もしこの説によるならば種々の煩惱とは煩惱が原因となつて起こる「煩惱の力用」であつて、それが罪障であり、種々の罪と同物であると述べている。

これらのことから盛林は次のように述べている。

此文明分二門懸隔一流相无相傳至隠无処有眼何此等疏書不拜見乎諦聴々々西誉上人如執者為淺智短才末学尽大悲後作記直翰墨給(十二丁左)

つまり、この聖聡の文は明らかに二門の懸隔を分明にしたものであり、浄土宗における相・無相伝の至りを表している。それなのにどうしてこれらの疏書を拝見しないのかと述べ、その後、よく聞き分けよと言ひ、聖聡は存応のような浅智短才の末学の者の為に、この書を書きしるされたのだと述べている。

また存応が、念仏の行は凡夫のための行であり、三毒は起こるが、念念に念仏すれば衆罪が消除することが出来るということに対して、盛林は次のように反論している。

執者自問自答下凡夫理又三毒起許也惣未断煩惱凡夫云一念力煩惱断尽其聖者云愛妻愛子惜身惜命者凡夫云凡聖起尽一向不弁之撥无因果邪見也又煩惱断尽上重煩惱起許終无轉迷成覚之入眼云一笑云(十二丁右)

つまり盛林は、存応が自問自答の後に、凡夫の理として、三毒は起こると認めている。しかし、おおよそ煩惱を断てない者のことを凡夫というのであり、もしも一念によつて煩惱が断尽するのであればそれは聖者ということになる。また愛妻、愛子、惜身、惜命の者を凡夫というのである。これらのことから存応は凡と聖における三毒煩惱の起と尽を一向に理解出来ておらず、それは因果を否定する邪見であり、煩惱断尽の上に重ねて煩惱が起るとするならば、ついに転迷成覚出来ない」と存応の見解を批判している。

また盛林は、存応の随犯随懺の理解に対して次のように述べている。随犯随懺之言道懺悔之文滅罪力用證消除衆罪皆以名号滅罪之文曾无煩惱断尽言一一今成潤色可笑云執者引文大原云凡癡惡修善乃至息妄行也上此文又罪断尽備證文也於此文中取何文言煩惱断意得汝能視聴(十二丁左)

つまり、随犯随懺の言葉は、道懺悔之文、滅罪力用の証、消除衆罪、それらは全て名号による滅罪の文である。かつて一度も煩惱滅尽の言葉はないことから、存応の見解は笑うべき潤色であると述べ、存応は『大原談義聞書鈔』の文を引用して煩惱断尽の証文としているが、盛林は存応がこの文の中のどの文言をもつて断煩惱であると理解したのであろうかと疑問を呈し、自らの理解を次のように述べている。

癡惡業道邊息妄罪道邊也然癡惡修善息忘修心惣諸仏教意如何願力強緣往生於業煩惱惡法被息程癡惡雖志一生造惡凡夫相續妄念衆生業煩惱欲息癡終不被止此止物何物業罪雖然力、ル惡罪煩惱我等助給本願不願我身惡平唱名号自然



滅罪生善也又文中造罪上癡惡法妄心中息妄行也〔十二丁左〕

つまり、癡惡は業道の辺のことであり、息妄は煩惱道の辺のことである。そのため癡惡修善、息妄修心はすべての諸仏の教意であつて、いくら願力強縁の往生であるとしても業・煩惱の惡法に關しては止めるよう癡惡を志すといつても、一生造惡の凡夫、相續妄念の衆生であるので、どうしても止めることが出来ないのである。そうであるけれども、このような惡業・煩惱の我等を助けて下さる本願であるので我等の惡を顧ず、平に名号を唱えることによつて自然に滅罪生善になると述べている。つまり、念佛によつて現世の罪障が滅するといつてゐるのである。

また存応が引用した『大原談義聞書鈔』の「造罪上癡惡法妄心中息妄行也」〔十三丁右〕という文を盛林は次のように理解している。

此意俗出共終焉砌十惡業止ラレヌソ然スヘテ止スニイテ念佛申トシテハ不レ叶故大方造罪之毎度押付南无阿弥陀佛唱又妄念濁澄申スレハ轉増濁故妄念起々打捨南无阿弥陀佛南无阿弥陀佛申受名号功力自然妄念ウスラク也是癡惡法息妄行云也〔十三丁右〕

つまり、この文意は凡夫と聖人共に臨終の時に臨んで十惡業が止められないので、すべて止めずに念仏を申そうとしても叶わないのである。そのため、罪を犯す度毎に念仏を唱え、また妄念の濁りを澄まそうとして念仏すれば、かえつて濁が増すことになるので、妄念が起るなら起ればと打ち捨てて念佛を唱えることで、その名号の功力によつて自然と妄念は薄らいでいくことから、これらを癡惡の法、息妄の行

と云うのである、と述べている。

二つ目の再反論は、存応が宗門の意は極惡最下の凡夫救済を本意としているので、未斷惑の凡夫でも報土に往生出来るが、これは横超斷の利益であると述べている。その横超斷の利益について存応が『無量壽經』卷下、『安樂集』卷下、『觀經疏』玄義分第一の文を引用し、たとえどのような凡夫の身であつても念仏行を修することによつて速やかに往生出来る。淨土に往生したならば一瞬の間に五惡道の災いが閉じると主張するのに対して、盛林は次のように述べている。

予云雖引經尺三ヶ処文此以文義一同也當流意從本横超斷付臨終斷極樂初生斷雖有二義一平生斷義曾无之然何平生一返念佛諸煩惱斷盡證乎不審云云〔十四丁右〕

つまり、存応が引用するところの文意はすべて同じであり、淨土宗の意では横超斷に關して「臨終斷」と「極樂初生斷」の二義はあるが、「平生斷」の義はない。それなのになぜ、平生に称える一遍の念仏による諸煩惱斷盡の証としているのか、と反論している。そして、存応が盛林は撰取される凡夫のこのみを知つていて、根本となる教義を知らないと批判しているのに対して、盛林は次のように述べている。

予云斷佛邊不斷機情各別判事不齊料簡也煩惱未斷凡夫念佛申臨終夕依佛力聖迎蓮臺結跏趺時斷四流勢用但斷者顯所離非是伏斷非是正斷所離斷也是則仏意機情啐啄横超斷也何夫卒角理不尽失可笑云云〔十三丁右〕

つまり盛林は、存応が斷は仏邊、未斷は衆生の心というように別々に理解する事は不整合の分別であると批判し、煩惱未斷の凡夫が念仏

することで臨終の夕に仏力聖迎により蓮台に座す時に断四流の勢用にあずかることになると言っている。しかし、「断」とは「所離」を顕しており、「伏断」、「正断」のどちらでもない。仏の心と衆生の心とが啐啄するので横超断というのである、と反論している。盛林によれば「断」とは、選択本願念仏によって、生死・穢土・四流を離れることを顕しているものであり、煩惱の働きを一時的に停止する「伏断」でもなく、煩惱を正しく断除する「正断」でもないというのである。

### おわりに

江戸期に著された『念佛三毒滅尽不滅盡之諍論記』には念仏行の「滅罪」、「滅三毒」をめぐる諸師の論争が集録されている。本論文では、その中の存応と盛林の論争を中心にして、両者の見解を見てきた。

盛林の主張は「浄福寺筆記」に伝えられているが、それによれば、念仏によって罪障は滅するが煩惱は滅しないと主張していた。これに対して存応は、『無量寿経』等の仏典をよりどころとして念仏によって煩惱と罪障は共に滅すると主張していた。念仏の「滅」をめぐる存応と盛林の見解は大筋次のようなものである。

存応は、念仏は勝行であるから煩惱も罪障も共に滅すると主張するが、盛林はこの見解に対して、中国の説話に由来する「名剣も使う人の腕前によって切れ味が違う」という文言を引きながら、念仏の「滅」という功德が及ぶ範囲は、称える者の機根によって差異があると述べている。盛林によれば存応の見解は、凡夫という機根を忘れて、

ただ本願名号の念仏による煩惱断尽を述べていると批判している。また盛林は、煩惱を原因として起こるものが罪障であると理解するところから、念仏による「滅」は「罪障」のみを指して「煩惱」には及ばないと見ている。このように盛林は機根による「滅」の及ぶ範囲の違いを強調する。

また存応は、横超断の利益によって如何なる凡夫であっても念仏することで速やかに極楽浄土に往生し、一瞬の間に五惡の災いが閉じると理解し、平生の念仏による煩惱断尽を主張している。これに対して盛林は、「断」とは念仏によって、生死・穢土・四流を「離れる」ことを顕している。その「断」についていえば、煩惱の働を一時的に停止する「伏断」でもなく、煩惱を正しく断除する「正断」でもなく「所離」であると述べている。

つまり存応の滅罪観は、「滅」、「断」の働が全て念仏者が称える本願名号の功德に重点を置いて理解され、往生の際には全ての煩惱と罪障が滅すると主張するものである。一方、盛林は、凡夫は煩惱を具足することが常であり、だから念仏によって煩惱を原因として起こる「罪障」のみが除かれ、未断惑で往生浄土を得ると主張している。

存応も盛林も共に聖阿や聖聡の著作を用いながらもその理解を異にしている。存応は、煩惱と罪障を一括りにするのに対し、盛林はあくまでそれを峻別するところにある。両者共に家康と面識があり翼下にあったために、この論争は激しいものであったがそれ以上表だって繰り返されることは無かったのであろう。

本論文においては存応と盛林を中心に見てきたが、本書には團誉、

善慶、幡随意の滅罪論も出てくるので、この三人の論点についても今後の課題としたい。

〔注〕

『念佛三毒滅尽不滅尽之諍論記』は大谷大学図書館所蔵本に依った。丁数はそこに後人によって付されているものに依った。本論文では引用の末尾にその丁数を記した。

(1) 本研究に関しては次のような先行研究がある。

・荻野圓戒稿「文禄慶長の宗論に就き」(『浄土学』第十三輯 大正大学浄土学研究会 一九三八年)

・玉山成元「近世初期の浄土宗——とくに源誓存応の宗政を中心に——」(『仏教史研究』三号 大正大学史学会 一九六八年)

・宇高良哲「関東浄土宗法度の成立過程について——特に念仏三毒滅不滅諍論を中心に——」(『日本歴史』第二五七号 吉川弘文館 一九六九年)

・宇高良哲「関東浄土宗法度の成立過程」(『印度学仏教学研究』十八日本印度学仏教学会 一九六九年)

・玉山成元『中世浄土宗教団史の研究』(山喜房佛書林 一九八〇年)

(2) 四義説は虎角の『浄土四義私』に出る。「浄土宗義を実体化用教門実義の四つの範疇によって解説したもの。この四義は明らかに『大原談義聞書鈔』における実体化用の説と、聖罔の『二蔵二教頌義』に説く教門実義の分判とを組み合わせたもので、江戸時代を通じ、檀林講学の基準として広く用いられた。」(『浄土宗大辞典』二二八九頁)

(3) 坪井俊映著『浄土三部経概説』九〇頁を参照。

(4) 『大正蔵』第十二卷二七〇頁中。『浄全』第一卷十三頁

(5) 『選択傳弘決疑鈔』卷第一(『浄全』第七卷一八九頁)。「徹選択本願念佛集」上(『浄全』第七卷八十七頁上)。「大原談義聞書鈔」(『昭法

全』一〇九二頁)。「念佛三昧宝王詩序」(木村英一編『慧遠研究遺文篇』七十八頁)

(6) 『浄全』第十一卷五九六頁下

(7) 『選択集』五十頁

(8) 『大正蔵』第四十七卷一二四頁上。『浄全』第六卷七一頁下

(9) 『觀經玄義分』第一(『浄全』第二卷上)

(10) 『法華讃』卷下(『浄全』第四卷十五頁上)

(11) 『浄全』第四卷五五一頁上

(12) 『浄全』第一卷六七五頁下

(13) 『徹選択本願念佛集』下(『浄全』第七卷一〇二頁下)。「徹選択本末口傳抄」下(『浄全』第七卷一四七頁上)

(14) 所離・伏断・正断という用語は、聖罔『傳通記釋鈔』卷第四(『浄全』第三卷一二九頁下十四行目)や、聖聰『大原談義聞書抄見聞』

(『浄全』第十四卷七八二頁下)に出るが、いづれも横超断四流に關して使用されている。

(たち かずのり 文学研究科浄土学専攻修士課程修了)

(指導…藤堂 俊英 教授)

二〇二一年九月二十九日受理